

---

# ええ～めんどくさい

マエダルマ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ええ～めんどくさい

### 【Zコード】

Z8017X

### 【作者名】

マヒダルマ

### 【あらすじ】

めんどくさがりの主人公に起こる様々な出来事を解決していく話です。バトルや笑いなどの要素もあり、主人公最強ものです。

## プロローグ

俺の名前は見中 央太。

俺のいる世界では魔法が当たり前に存在している。まあ、もちろん使えない人もいない訳ではない。使えたとしても、魔法は属性魔法と無属性魔法があり、属性魔法は一人一種類しか使えず、魔法は火、水、電気、風、土、草、召喚術の7つある内のどれかである。俺はまあ、いろいろだな、うん。そして無属性魔法は誰でも使えるものである。

俺は今、日本にいくつかある魔法学校の、第9魔法学園の一年生である。

まあ、軽い気持ちで入ってしまったのだが、俺の予想とは異なる生活が待っていた。

「ふあ～あ

大きな欠伸しながら俺の目は覚めた。只今、午前6時である。いつもは、こんなに早く起きないのだが、今日は入学式といふこともあって、姉貴が早く起こしたのだ。

ふと、横に違和感を感じて見てみると、女の子が一人俺のベッドで気持ち良さそうに寝ている。

その女の子は、水色の髪を腰まで伸ばしていて、顔は百人中百人が振り向く程の美少女だ。

俺が起きたことを感じ取ったのか、その子も体を起こして、

「お兄ちゃん、おはよ～。」

と、俺にいった。

「また、お前忍び込んだのか？」

と聞くと、

「何言つてるの？お兄ちゃん。私とお兄ちゃんは一心同体なんだから同じベッドで寝るのは、当たり前じゃない。」

といきなり頭の痛い発言をしてきた。

まあ、いつものことなので気にせず朝食の用意がされているであろうリビングに降りていった。

ちなみにさつきの女の子は俺の妹である見中真みなかまことという子でちょっと

とした、いや、かなりのブラコンである。年は俺と同い年だが双子という訳ではない。そして、俺には、姉貴がいて、彼女の名前は見なか雲みなかくも

真と同じように水色の髪をもつかなりの美人であるのだが・・・

「央君おはよ～！」と言ひながら、いきなり抱きついてきた。

そう、この人もここが問題なのだ。真と同じ、かなりのブラコンで

ある。

やれやれと思いながら、姉貴をはがして席につき朝食を食べ始めた。ちなみに俺の両親は今、海外へ赴任中で俺たち三人しかいない。と思っている内に姉貴が俺の方をみてニヤニヤしていることに気付いた。あまりにも気持ち悪かったので理由を聞いてみると、

「だつて、これから毎日、央君と一緒に学園まで行けるじゃない。」

といつてきた。俺ははいはい、そうですかと軽く受け流し、食べ終わつたので皿を片付けようとしていたら、姉貴が俺を呼び止めた。いつたいどうしたのだろう?と思って振り返ると、

「ご飯粒ついてるよ」といつて、俺の頬についたご飯粒をとつて、そのまま口に持つていきそれを食べた。  
まじかよ。

普通ここまでするか?おつと、うちは普通じゃないんだつた。でもなんとなく恥ずかしかつたので、ちらりと姉貴の方を見てみると、姉貴は嬉しそうにニコニコしていた。だが、急に殺気を感じたのでそちらの方を見てみると、俺の後ろで手を握りしめたまま真が震えながら立つていた。そして次の瞬間、

「お姉ちゃん、ずるい。お兄ちゃんについたご飯粒食べるなんて!そんなことするなら、私はお兄ちゃんを直接なめるもん!」  
いや、妹よそれは違うんじゃないか?と思っていると、

「別にいいんじゃない?そしたら、私も思つ存分できるし。」  
と、姉貴が言った。

おいおい、あんたら頭大丈夫か?もう病院行つてこいよ。とか、考えていいると、

「ダメだよ。お兄ちゃんは、私の物なんだから。」  
と姉貴に向かつて言つていた。もうツッコム気もねえや。

「あなたこそダメよ。央君は私の物なんだから。」

と姉貴が言い返していた。そのままお互いにらみあつたまま、真が突然手を前方につきだして

「水よ私の刃となり切り裂け、アクア・スラッシュ」  
とまさかの、呪文を唱えてきた。それは三日月型を描いて姉貴に向かって行った。しかし、姉貴も全く同じタイミングで同じ呪文を唱えていて、2つの魔法はぶつかり消えた。

真も姉貴ももう新しい呪文を唱えていた。姉妹喧嘩で魔法使うとか、どんだけなんだよ。と思いながら、俺は学園にいく準備をしていた。

学園へこむるべ。 (後書き)

ぜひ、感想をお聞かせください。

あの後、喧嘩していた姉貴達をめんどくせーので、無視して行こうと思つたら、俺が家を出る直前に喧嘩をやめ、準備を済まして、（ちなみに準備は俺がまばたきしている間に終わっていた。）俺の腕に抱きついてきた。一人を引き剥がすことは、めんどくせーのでしない。むしろやつたとしても、この一人は絶対に離れないだろう。そしてその一人は俺を挟んだまんらみあつていた。「よそでやつてくれ」と思つてはいるが、もし言つたのら、想像出来ないほどめんどくさいことになるだろう。

そんなこんなで、歩いていると、

「おーい。央太ー」

と元気な声が聞こえて、ドンーと背中に衝撃がきた。振り向いてみると、赤い髪をショートカットにしたボーグッシュな美少女が俺の背中に抱きついていた。

彼女の名前は、

西名 炒子（にしな しょつこ）俺の幼なじみズの一人である。

「おはよう。央太」

「ああ、おはよう炒子。てゅーかや、離れてくんない？」

「ええ～何で？」

何でつて・・・はあ。

俺が心の中でため息をついていると、俺にしか聞こえないような声で、

「だつて、こつちの方が面白いじゃない。それに央太さんよければ私がまわないよ。」と後半の部分は姉貴達に聞こえたが、こいつてきた。

こいつは、何がしたいのだろうか？姉貴達に「あなたを殺して私も死ぬ！」

的なことを言わせたいのだろうか？

「ちよつと、お兄ちゃんから離れてよ。炒子。」

「そりよ。炒子ちゃん。央君は私の物なんだから。」

いや、別に姉貴の物じやないぞ？

「ちよつと、お姉ちゃんざくさに紛れて、何いつてるのよ！お兄ちゃんはもう私とあんなことや、こんなことをしてるんだからね！」

お前こそ、何をいつているんだ！？俺はお前と何もやつた記憶はないんだが！？何はともあれ、これ以上、天下の往来で変なこと言われたら、たまんないな。そろそろ止めるか。

「おい真、嘘ばつか・・・

「おはよつ！」ざこます、央太様。」

ああ、おはよつ。」

今、俺に挨拶してきたのは、イギリスにある大企業の「令嬢で、彼女の名前は

エレクティア・イーストといつて、キレイ金色の髪をサイドで軽く括つて、残りはそのままにしていて、腰まである。彼女もかなりの美少女だ。皆はエレンと呼んでいる。

「時に央太様、私と今から、良いことしませんか？」

「いや、しねえーよ！？」

「即答ですか・・・。でもでも、私は諦めません。」

といいながら、俺に体を寄せてきた。

いや、もうそこはあきらめれば？

にしても、そろそろ離さないといけないな。

「おい、皆そろそろ離れて・・・。」

「死ぬリア充。」という声が上から、鎌鼬と一緒に降ってきた。

俺は急いで身体強化魔法を使って俺に張り付いている奴ら<sup>ら</sup>と移動し、避けた。

「おい、危ねえじゃねえか！」

「黙れ、このリア充。大人しく消えろ！」

と俺に向かつて吠えているのは、薄い緑色の髪を首の中間ぐらいで伸びて結んでいる。一いつの名前は、神谷 風希<sup>かみや ふうき</sup>。俺の幼なじみズの一人である。こいつの属性魔法は風であるため、飛びこができる。まあこいつ、結構イケメンなんだが、性格に難があるため、残念な一枚目と呼ばれている。

「風希ーお兄ちゃんに何してんのよ。」

「そ、うよ、風希くん。して良いことと、悪いことがあるわよ。」

「もう、これはあれですね。」

「そうだな。あれしかないな。」

「あの、皆さんあれとは何ですか？」

と風希がビビりながら聞くと、

「「「「「決まってるじゃない（ですか）（か）死刑だよ」」」  
と言つた瞬間、風希が逃げようとしたが、エレンが身体強化魔法を使い、捕えた。（エレンは電気の属性魔法が使って、普通は無属性魔法である、身体強化魔法も電気属性を附加すると、かなり速くなる。）

はあ、全く風希もアホだな。

「お兄ちゃん。先にいっててくれない？」

「わかった。ほどほどに・・・いや全力でやってやれ。」

風希がこっちを嬉しそうに見てきたので訂正したら、憎しみを込めた目で見てきたが、無視して俺は学園へ向かった。

## 入学式？

その後、何事もなく俺は学園についた。

学園に着くと、見た田の良く似た双子が、話かけてきた。

「おはよう、央太。」

「おはよう、央太君。」

話かけてきた双子の男の子の方の名前は、亞宮 あみや 神流 かんな といつ。ここつらも、俺の幼なじみズである。

「ああ、おはよう。召慈、神流」

「今日は、残りの皆はどうした？」

「そうですよ。他の皆さんは？」

「ああ？ でも、多分今頃……」

「お兄ちゃん。」

お、来たな。風希は？。」

「えつ、風希誰デスカソーレ？」

「いやなんでもない。」

「なに？ 風希がまたやらかしたのか？」

と召慈が聞いてきたので、

「ああ。俺に向かっていきなり鎌鼬撃つてきただよ。そしたら、真達が怒つちやつてや。」

「成る程な。でも、可哀想だ……いや、風希が悪いな。うん。でさ、風希生きてるのか？」

女性陣が鋭い目付きでこちらを見たため急に言葉を変えた召慈がこつそりと聞いてきたので、

「わからんねえ。今日は、真と姉貴が家を出る前に喧嘩していたからな。」

「そいつはまた……御愁傷様だな。」

と俺と召慈が黙祷を捧げていると、

「なあ、央太。くる途中こんなもの拾つたんだが。」

と声をかけられた。声のした方を見てみると、ぼろぼろになつた風希を担いでいた。そいつは、俺の幼なじみズの一人で、名前は北波圭悟きたばけいごといって、なんつうかまあ、でかいやつだ。「うーん。まあ、しじうがないしからな。真、キズが見えないよう治してやれ。」

真は「ええ」と言つてゐるが無視することにする。ここでは話は変わるが、真は水の属性魔法を使うことができる。水の属性魔法には、治癒魔法が入つてゐる。

「圭悟、そんなの拾つてこなればよかつたのに。」

と炒子が言つたので、圭悟は不思議そうな顔をした。それを見ていた、エレンが説明すると、納得したような顔になつた。（圭悟は表情の変化が分かりづらく、分かるのは俺達幼なじみズと、エレンぐらいのものだ。）

しばらくそのまま雑談していると、

「あ、大変もう私行かないと。」

と姉貴が言つたので、俺達も会場である体育館に向かつことにした。

## 入学式？

体育館に着いて、しばらくすると、入学式が始まった。

ちなみにこの学園は、入学式の時点ではクラスが決まっていないため、自由に座ることが出来る。だから俺と幼なじみズは固まって座っていた。

そして、この入学式の後に属性魔法との相性や魔法の発動速度、魔力の保有量の三点を計測して、クラスを決めることになつていて。

また、魔法には現代魔法と古代魔法がある。現代魔法は魔法補助装置（SAS）と呼ばれる機械が必要だが、呪文詠唱がなく自分の思った通りに使うことができる。SASは使う人によって、様々な形をしていて腕輪だつたり、ネックレスだつたりする。

次に、古代魔法は何の機械もいらない。しかし、呪文詠唱があり決まった魔法しか使えない。

でも現代魔法とは、比べ物ならない威力を誇っている。

そもそもSASとは、古代魔法が呪文詠唱によつて魔法陣を展開するのに対し、予め作つておいた魔法陣を記録して、使用者の意志に応じて展開する装置である。それなら、古代魔法も記録させればいい。と思うかも知れないが、この世界で声とは、かなり重要な意味を持つあるため、言葉でいうことが大事なのである。また、魔法陣を言葉に置き換えることは不可能に近いため、古代魔法と現代魔法に別れている。魔法の発動速度は現代魔法の発動速度を表している。さて、入学式の方は始まつてから結構な時間が経つていて、そのほとんどどが学園長とか言う太つたオツサンの話である。もう、何でこういう人の話は長いのだろうか？早く終われよ。むしろ終われ。てゆーか、消えろこのくそ豚が！おつと、やつべ殺意が湧いてきた。俺は自分を落ち着けるために周りを見てた。すると、風希が完全に寝ていた。（風希は治癒魔法を施された後、目をさまして何とか歩けるくらいまで回復していた。）

風希の横を見てみると、悟がしつかり背筋を伸ばしたまま寝ていた。まあ、こいつは昔から変なところで真面目だったの別に珍しくない。

いや、まあ珍しくないだけでおかしくはあるのだが、めんどこので起こすようなことはしない。てゆーか、もう飽きたのでフケてしまおうと思い、じつそりと脱出することにした。そしてドアの前まで来たとき、

「あなたどこにいくの！？」

と全国のロリコンが聞いたら悶え死ぬようなかわいい声が聞こえ、ドアが氷付けになっていた。うんざりしながら前を見ると、どうからどう見ても小学生にしか見えない女の子が壇上からじちらを見ていた。

「あなた、計測の後理事長室に来なさい。」

どうやら学園長の話は終わり、理事長の話になっていたみたいだ。しうがないので席に戻り、そのまま入学式を受け続けた。

しかし、風希はこちらを見てニヤニヤしていたので、ドアの方に身体強化魔法を使い思いつきり投げつけてやると、ドア」と氷付けになっていた。さあーみると思つてみると、幼なじみズが冷たい目で見てきた。

その後、入学式も終わり測定が始まつた。俺はやる気なんて微塵もなかつたので、適当に済まして皆と喋りながら、理事長室に向かわず帰ろう。と思い校門で待つていてる幼なじみズに手を振ろうとしたら、背中に違和感を感じた。振り向いてみると悪魔のような笑みを浮かべた理事長が背中に張り付いていた。

「ああ、行きましょう央ちゃん」

「はい。理事ちょ・・・いや、霧<sup>みぞれ</sup>伯母<sup>伯母</sup>さん。  
と俺は苦笑しながら答えるのだった。

## 理事長室での出来事

そんなこんなで俺は今、理事長室にいる。風希と一緒に。俺は霧伯母さんに捕まつた後、取り敢えず校門にいった。校門へと進みながら、どうして理事長室に行かないといけないのか聞くと、俺が入学式をサボろうとしたかららしい。まあ、当然そんなことは分かつていただが、俺は言質が欲しかったので、そんな分かりきったことを聞いたのだ。

この言葉が意味するものは・・・・・

「よし、じゃあ行つてくれるか。ほら、いくぞ風希。お前達は先に帰つてて良いぞ。」

「ちよ、何でお

「いいよ、お兄ちゃん。私達待つてるから。ねえ姫?」

「私もそれでいいですよ。」

「私もかまわないよ。」

「僕も異論はないかな。」

「俺もかまわんぞ」

て、聞けよお前ら! !

と上からエレン、炒子、神流、召慈、圭悟の順に了承の返事をする。

「わかった。それじゃあ少し待つてくれ。ほら風希自分で歩け。」

「くそ、何で俺もなんだよ。」

と愚痴つてきたので、俺はさつき霧伯母さんから得た言質を使つた。

「それはお前が入学式を抜け出そうとしたからだよ。」

「あーーーそれはお前が俺を放り投げたからだろーー? くそー理不

尽だーー」

と俺に引き摺られながらも叫んでいた。

そして、理事長室に来たのだが、霧伯母さんが風希を見た後、

「なんで風希君がいるの！？」

と若干きれながら言つてきた。俺は、

「だつて、霧伯母さん

「伯母さん言つな！」

・・・霧さんが入学式を抜け出そうとしたから呼び出した。つて  
言つてたじやないですか。そしたら、風希もだなと思つて。」  
と言つと、

「分かつたわ。それじゃあ・・・・」

と言ひながら机に置いてあつたベルを鳴らした。すると、体の「ゴツ  
イお兄さん達が出てきた。

「そこにいる子をあの豚・・・じゃなかつた、学園長の所に連れ  
ていつて反省文でも書かせときなさい。」

霧さんが命令を出すと、お兄さん達は風希を担いでいつてしまつた。  
その時、風希は売られていく子牛のような目をしていた。さすがに、  
俺でも、可哀想だな。と思つたが、自分が大事なので霧さんの  
方を向き言い訳を始めた。

「いや、俺は別に霧さんの話を聞きたくなかった訳じゃなくて  
「そんなことどうでもいいのー」

・・・・・・

ええ～じゃあなんで呼び出したんだよ。全くこの人は意味がわから  
ない。一応俺の伯母さんにある人なのだが、見た目は小学生の  
くせに、実年齢はぐふあ！？

「ちよつと、いきなり殴らないでくださいよー！？」

この人はいきなり身体強化魔法をつかつて殴つてきた。しかも、誰  
も反応出来ないような速度で。にしても、よく無事だつたな俺の首。

普通ならもげてたね。うん。

「仕方無いじゃないの。女性の年齢を勝手にざらざらするからよ。」

え、なにこの人。人の心の中まで読めるの…?と俺は戦慄しつつも要件を聞いた。

「じゃあ、何で呼んだんですか?」

「それは、私と央ちゃんが愛し合つた

「失礼しました!」

ちょっと、待ちなさい。」

俺は全力で逃げた。身体強化魔法の発動と同時にそこにあったものを霧さんに投げつけた。何とか理事長室を抜け出した俺は、風希の所にいくことにした。階段を登ろうとしたとき、足を踏み外したのか翠色の髪をしてメガネを掛けた女の子が降ってきた。俺は仕方無くその女の子を受け止めて、抱き抱えたまま階段を登つた。登りきると、女の子を下ろして先に行こうとするとい、女の子が声を掛けてきた。

「あの、ありがとうございます。」

「いいよ、別に気にしなくて。」

しかし、この子改めて見ると美少女だな。おっと、急がないといけないんだった。

「あの、お名前は…」

「「」めん。急いでるから、また今度ね。」

え、はい。わかりました。」

「じゃあね。」

さて、風希が居るのは職員室だろな。さつき風希から居場所を伝える風が届いたし。

そして、俺は職員室のドアを開けて、

「風希、帰るぞ!」と声をかけると、待つてましたと言わんばかりに喜んいた。そのまま、廊下側の窓から飛び出し脱出した。校門まで向かう途中霧さんから、「今日のところは勘弁してあげる。」

とメールが来たので俺は安心して校門まで向かうのであった。

「わりいな、皆。待たせちまつて。」

俺が息を整えながら言つと、皆、別に大丈夫だよ。的なことをいつてくれた。

そして、皆で雑談をしながら、校門を出て家に向かつて歩きだした。家に向かつ途中でエレンと姉貴と真と炒子が、俺と腕を誰が組むかでもめていたが、周りの視線が痛かったので、それを止めさせて、家に帰つた。

## クラスの差別化して決闘へ（前書き）

今回は結構ながいですよ。

そしてやつとバトルって感じです。

## クラスの差別として決闘へ

俺は今、家にある自分の部屋でくつろいでいる。

家に帰りついた後すぐに、姉貴と真が、準備があるから。といつてまた、家から出ていった。俺は何故この時忘れていたのだろう？姉貴達は信じられないぐらいのブラコンであると・・・・・

「央君、ちょっと降りてきてくれない？」

と姉貴が声をかけてきた。しかし、何かがおかしい。何時もと少し声が違うような気がする。だが、気のせいだと思いリビングへと降りていった。

リビングに着くと、いきなり、魔法が飛んできた。俺は身体強化魔法を即座に使用し回避しようとするが、何故か体が動かない。下を見てみると、属性附加した身体強化魔法を使ったエレンがいた。

俺は、戸惑いながらも攻撃から身を守る為に俺だけが使える無詠唱の古代魔法を使つた。中身は古代魔法である『アクア・シールド』と変わりはない。そう、俺は例外で古代魔法を無詠唱で使えるのだ。

魔法同士がぶつかり消滅した。どうやら相手も初級魔法を使つたらしい。（ちなみに属性魔法は、初級、中級、上級、最上級の4つに分けられている。）

俺は魔法を撃つてきた相手にエレンを引き剥がしながら聞いた。

「おい真、何するんだ！？」

「お兄ちゃんがいけないんだよ。だつて、お兄ちゃんから知らない女の子の匂いがするんだもん仕方無いよ。」

「えつ、何を言つているんだ？」

「だからね、皆に集まつて貰つたんだ。お兄ちゃんをお仕置きするためださ。」

いや、いつていう意味がわからない。俺は別に幼なじみズ以外の女の子とふれ合つた記憶は・・・あーあるな。うん。しかし、たつた1、2秒だぞ。匂いなんてわかんねえだろ普通だ。

しかし、愚痴つてばかりでもしようがないのでここは、逃げることにしよう。そう思い、身体強化魔法に電気の属性を付加して、逃げようとしてすると声をかけられた。

「無駄だぞ、央太。この家には私達四人で作つた結界が張つてあるからな」

炒子お前も來ていたのか。てかいつの間に結界なんか・・・しまつた。家に帰りついて言つていた、「準備があるから」とはこれの事だつたのか！

「ちつ、皆誤解だ俺は別に女の子とイチャイチャしてきたわけではない。ただ階段から落ちてきた子を助けただけだ。」

「じゃあ、今の『ちつ』てどういう意味なんだ？ああん？」

と炒子が凄んでくる。俺は、

「どうせ言つたつて信じてくれないとおもつたからだ。」

と本心を語ると、この場の気温が一気に下がつた。しかし、すぐに暖かく、いや暑くなつた。前者は姉貴と真が全力でSASに魔力を注ぎ、水の魔力が溢れだしたから。後者は、炒子とエレンの火と電気の魔力がSASから溢れ始めたから。

「お、おい皆。何でそんなに魔力を入れいるんだ？」

「『』『』『』だつて央君（お兄ちゃん）（央太）（央太様）が私達の

ことを信用してくれないから、お仕置きが余計に必要でしょ？（じやない）（ですか）（だろ）」――  
あ～あ。選択肢ミスったかな？

翌日、目が覚めると俺はベッドの上にいた。横を見ると、幸せそうな顔で姉貴と真が寝ていた。

俺は一人を起こさないようついにベッドを抜け出すと、洗面所へと向かつた。

「あ～あ。こりや酷いな。」

と俺は、鏡を見ながらぼやいていた。結局あの後、現代魔法の上級魔法（現代魔法の上級魔法は古代魔法の中級魔法ほどの威力しかない。）を四方向から受けてしまい、記憶が途切れていった。

俺は気合いを入れ直し、治癒魔法をかくて顔のキズだけでも治してから朝食を作つて、姉貴達が起きてくるのを待つて学園へ出掛けた。

今日、学園ではクラス発表があるので、早い時間にも関わらず沢山の人があつた。

この学園は属性別にクラスがA～CまであつてAから順に成績のいい順に入つていく。そして、各属性で一番の成績優秀者が集められ

たSクラスがある。また、逆に各属性の成績最下位が集められたGクラスがある。

さて、Sクラスを見てみると、水属性は真、火属性は炒子、電気属性はエレン、土属性は圭悟、召喚術は神流、と言つ具合になつていた。風属性と草属性は知らない名前だった。何にしても、予想通りと言つたら予想通りなのが風希の名前がないのが以外だな。と思つてみると、真もそう思つているらしく、

「風希の名前何でないんだろう？」  
と言つてきた。

「後で本人でも聞いてみるか。」

「そうだね。でもお兄ちゃんと同じクラスになれないのはショックだな。」

と悲しそうに言つてきた。真は靈さんと全力で計測に望むよつて言われていたのだ。

「良いじゃないか。俺は真がSクラスに入れて嬉しいぞ。」  
と言つながら頭を撫でてやると、顔を赤くしながら、「うん。」と小さな声で答えた。

そして、俺のクラスを見てみるとなんとGクラスだったのだ。（俺は一応水のクラスで受験している。）

やつべ、めんぢくさいからつてちょっと適当過ぎたかなーと思つてGクラスのメンバーを見てみると、風希と召慈の名前があった。おかしいな、風希はさつきいつた通りSクラスに居てもおかしくないし、召慈は神流について学年次席をとるくらいの実力を持っている。まあ、考えても仕方無いので教室着いてから聞こうと思つて真と別れて教室に向かつた。

教室に着くとそれは酷い有り様だつた。傾いている机に、今にも壊れそうな椅子本当に教室なのか？廃材置き場じゃなくて？と言えるぐらい酷かつた。

机に向かつて歩いていると、召慈と風希が喋つて居るのが見えたので、机に鞄を掛けそちらに向かつた。

「お～い、風希、召慈、おはよう。なあ、何でお前らGクラスなんだ？」

「僕はわざとだよ。Sクラスは神流に譲つたは良いんだけど、Aクラスで一人ぼっちてのは寂しいだろ？だから、未来視を持つ聖靈神を出して

「なあ、お前さ氣軽に聖靈神出したとか言つてるけど、それいちお最上級魔法だろ？そんなことに使うなよ。」

大丈夫だよ。ちゃんと家で使つてきたからさ。んまあ、それで央太がどのクラスに入るか調べてきてこのクラスに入つたんだよ。」

「まあ、いいや。それで風希は？」

「あつ、俺の場合はもつと簡単だよ。まず、朝つぱらから学年いや、学園の一位を争うほどの実力者達にぼほこぼこにされて、その後ドアと一緒に氷付けにされたからなあ。もう、計測を受けられただけで奇跡だぜ？」

「ああ、そう言えばそんなこともあつたな。」

「いや、後者はお前のせいだからなー？」

「はつはつはつは。おつと、先生来し座るかな。」

「うん。そうした方がいいと思うよ。」

「流すのかよ・・・。はあ、もうこいよ。早く座れ。」

「おひ。」

俺は席に戻つていつた。

「よし、お前ら俺がお前らの担任だ。俺はお前達みたいなゴミ共の担任なんて嫌だが、まあ俺が就いてやるんだから有り難く思つんだな。」

ガタツ

「止める、風希。こんなやつ相手にする価値もない。」

と俺が横にいる風希を止めていると、

「おい、そこのお前、誰が『相手にする価値もない』だ、教師に喧嘩つってんのか？」

ちなみに、魔法学園で教師をやるには、かなりの実力者でないといけない。

はあ、全くこんなバカは何処にでも居るんだよな～まったく。

「別に先生の聞き間違いじゃないんですか？」

といつの間にか、召慈がそう答えていた。

「ああ、黙つとれこの出来損ないが。顔は似ているが、妹とは大事な部分が大違ひだな。」

「先生。何を言つてているんですか？いくら双子でも違うのは当たり前じやないんですか。それに、どこ見て言つてているんですか？」

と召慈が笑いを堪えながらきいた。

そう。このどうしようもないやつ（これからは、Gクラスの担任と言つことで、ゴキ先生と呼称する）は、黒板に向かつて言つていたのだ。原理は簡単で、まず召慈が、聖靈を出して方向感覚を混乱させ、俺が作った水の幻影を黒板の方におぐ。そして、風希の風で他の生徒達に魔法が見えないようにする。（この作戦を俺達はアイコンタクトだけで理解した。これぞ、幼なじみでこそ成せる技である。）すると、ゴキ先生は、突然黒板の方を向いて罵倒し出したように

見えるのだ。

「貴様ら～、教師をバカにしてただで済むと思つてゐるのか！？」

「でも先生～、僕達何もしてません。周りの人聞いてみたらどうですか？」

まあ、他の生徒達には見えていなかつたのだから、生徒達に聞いても仕方がないだろう。

「お前ら本当だらうな？嘘をついているんじゃないのかー？」

はははは、ゴキ先生が必死に生徒達に聞いてまわつていた。

『キーン』『一ーンカン』『一ーン』

おつと、チャイムがなつたな。授業が終わつて、少しの休憩にはいり、先生も一度職員室に帰る。ゴキ先生は教室を出るとき、ひかりを睨みながら出ていった。

「マジ腹立つな、ゴキ先生。」

と風希が話掛けってきた。

「まつたくだよ。ああいう差別思想は虫酸がはしるね。」

と忍慈も話しかけてきた。

「ああ、そうだな。しかし、相手にするのもめんどくせだからな。俺はシカトを決め込む事にするよ。」

「まあ、そうだな。あんなやつとは、口をあわせるのもイヤだしな。」

「ふう～ん。じゃあ僕はもう少し恥をかいてもらおうかな？」

「止めとけ。時間と労力の無駄だ。」

「いや～でもさあいつ心の中まで腐つてるよ？」

「それ、どういう意味だ？」

と風希が食い付いてきた。

「僕さ、ずっと心の見ることができる聖靈を出して居たんだけどさ僕達と話している時、心の底から僕達を見下してゐるんだよ。それに、神流や真ちゃんのこともバカにしてたし。多分たの人は、

「血縁重視主義」

そう。それだと思うよ。」

そもそも、属性魔法は、遺伝するものである。だから能力の高い人は血筋がいい人しかないと考えている人達のことを『血縁重視主義者』という。また、こいつらは有名な血筋じやないものはどれだけ能力が高くても認めようとせず、心の底から見下している。

「まったく。それじゃまた恥をかけてもらおうかな。」

「そうだよね。やっぱ『ういつ奴らはとにかくやつてやらないとね。』

「うん。確かにそうだな。じゃあやつてやるか。」

と風希が言つてきたので俺達は、

「もちろん。」

「当たり前じゃないか。」

と了承の返事をした。

## キーンゴーンカンゴーン

「おつと、授業始まるな。」

「本當だね。じゃあ僕は席に戻るよ。」

「ああ、わかった。」

と俺が返事を返しているとちょうどゴキ先生が入ってきた。

「なあ、央太あれつてさもしかしてさ、

「ああ、お前の想像通りのものだ。」

だよな。」

俺が笑いを堪えながら答えると、風希も笑いを堪えながら返してきた。ちらつと、召慈の方を見て見ると、召慈も笑いを堪えていた。

「おい、くず共これは嘘発見機だ。今からこれを使って同じ質問をする。嘘をついてるやつがいたら、そいつは退学だ。」

まったく。相変わらずバカだな。そんなん俺達に通用する訳ねえじやん。

「ほら、貴様手を出せ。」

俺は大人しく腕を出した。嘘発見機が付けられ同じ質問がされた。しかし、俺は魔力を使って脈などをコントロールしているので、まつたく意味がない。（ちなみに魔力で脈などをコントロールする事はかなり難しくSクラスでも、できる人は少ないだろう。）

そのまま、ゴキ先生は最後まで回りきった（召慈も風希も同じことをして逃れた。）が空振りに終わり呆然としていた。しかし、俺達は追い討ちをかけた。

「先生。頭おかしいんじゃないですか？」

「そうですよ。先生病院いった方が良いですよ。」

「おいおい。もし老化だつたらどうすんだよ？」

「あそつか。すいません、先生。やっぱ、現実を突き付けられるのはつらいですもんね。あまり気にしないで下さい。」

と風希が言つと、

「貴様ら、調子にのるなよ。」

とゴキ先生が言つてきたので、

「まあ、別に調子になんて乗つてないですけどね。」

と思つた通りのことを返した。すると、ゴキ先生は黒板に白額と書きなぐつて出ていった。

「はあつ、ざまーみろつて感じだな。」

「そうだな。あれでもう今日のところは来ないだろ？」

「うん。それじゃ時間まで何する？」

そんなこんなで時間は、過ぎていいくのだった。

そして、放課後になり（今日は一日だつたため午前で授業は終りなのだ。）靴箱に向かうと、Sクラス組が大量の人間に囲まれながら

らも既に待つていた。

「よつす。既早かつたな。」

と声をかけると周りに沢山いた男子連中を押し退けながら幼なじみズがやつて来た。

「あ、お兄ちゃん。それがね、何か職員室で先生が一人すつしぐへ怒つてゐるらしくて、その先生をなだめる為に、私達の担任も行つちやつたの。何かその先生、学園で二番目に強いらしくて、一番目に強い、私達の担任が行かないといけないらしいへて、殆ど血溜だつたの。」

それを聞いた途端、俺達Gクラス組は、吹き出すのを堪えて、「へえ～そうなんだ。」と答えた。

その時、後から、

「そんな、『ハリ共付き合わない方がいいよ。真さん』

とさつきまでSクラス組を囮んでいたイケメン達が話しかけてきた。俺達Gクラス組はそれを聞い笑いそうになつた。だつて言つてることがゴキ先生と一緒になんだぜ？

彼らの胸元のバッヂを見て見るとAとかいてある。成る程、Aクラスの人達か。

しかし、真達はそれを聞いて、

「あんたに、お兄ちゃんの何がわかるの？もしナンパしたいなら、お兄ちゃん倒してからにしてください。後、真さんだなんて気安く呼ばないでください。」

おい、真、厄介なこと言つなよ。めんどくせくなる匂いがブンブンするぞ。まあ、でも怒つてくれたのは嬉しいけどさ。

「ダメですよ、真さん。それじゃあハードルが高過ぎます。せめてダメージをあたえる程度でないと可哀想ですよ？」

えつ、何でエレンまでそんなこと言つてんの？

「おいおい、エレン。それでもまだ、高いぞ。精々一発当てる程度じゃないと。」

おこおい、一ヤーヤしながらなんて爆弾投下してんだ炒子さん！？

「それもそうですね。すいません。間違えました。」

「そこは肯定するなよ！？否定しないとめんどくさいことに・・・」

「あー！？こんなGクラスの雑魚に俺が負ける？あり得ねえな。

それじゃあ、真さん、俺が勝つたら俺と付き合ってくれる？」

「はい。もう一発でも攻撃を当てることが出来たら。」

なんでオッケーすんの？もつと自分を大事にしようぜ女の子！？

「ははっ余裕余裕。俺は水属性の学年次席だぜ？こんなG級に負ける訳ねえじゃん。それじゃあそこのお前、明日の放課後に第一闘技場こい。さて勝つたら何してもらおかな

「ちよっ、おい待てっておい・・・あーあ行つちやつたよ。

はあ。」

「やつたね！？お兄ちゃん。これでお兄ちゃんの力を目に見せつけることが出来るね」

「そうですよ、央太様。これはチャンスです。」

「ちよっどいいんじゃない？私達もああゆつの付きまとわれて困つてるし、うん。ちよっどいい。ここで頼んだよ私達のナイト様。」

「

くくつと笑いながら炒子が言つてくる。

「ねえ、嫌なお兄ちゃん？嫌ならいいよ。私が我慢すれば良いことだから。ぐすっ」

と泣きそうになりながら言つてくる。

あーもう、

「わあつた、わかつたよ。だから泣くな。」

「本当ーやつたー。ありがとう、お兄ちゃん」

なつ、嘘泣きだと・・・。くつそー、いつの間にこんな悪女になつたんだ。昔はあんなに素直だつたのに・・・。

「やだなー。お兄ちゃん 今も十分素直じゃない

な、なんだと。まさか俺の心の中を

「別に読んでなんかないよ？」

読んでいるだとーー。くつ、流石に霧さんの姪だな。

「まあ、いいや。取り敢えず、帰るか。」

ちなみに、神流と圭悟はこのやり取りを苦笑しながら見ていた。

次の日、何事もなく学園についた。授業は苛めすぎだのが、ゴキ先生は来なかつた。（ここは、最低クラスなので、先生は一人しかいない。）おかげで授業は全て自習となり、放課後の決闘までゆつくりする事ができた。まあ、ぶつちやけ、緊張はしていない。ただ昨日、姉貴に話たら、晩飯をたらふく食べさせられて少しいや、結構胸焼けがする。風希と召慈が流石に心配して、いろいろやつてくれた。

そして、放課後がきた。俺は体調が良くなり欠伸を堪えながら、S A S準備して第一闘技場に向かつた。

「お、良く逃げずについたな。」

闘技場に着くと水属性の学年次席（これからは、イケメソ君と呼称する）が話しかけてきた。まあ、相手をする必要もないのに無視していると、

「えつ、なにもしかしてビビつてんの？でも、今更遅いんだよねーくつくつく。」

何かとてつもない勘違いをしているがめんどくさいので訂正はしない。すると相手は、どんどん天狗になつていく。すると真が、

「今のうちに吠えときなさい。決闘が始まれば、あなたなんて、秒殺なんだから！！」

と言つた。

「へえ～そなんだ。じゃあ一分以内に倒せなかつたら、俺の勝

ちで良いよね？」

「当たり前じゃない！！その代わりお兄ちゃんが勝つたら一度と  
私達の前に現れないでよ！」

「いいぜ。なんならGクラス以下のクラス、伝説のHクラスに入つ  
てもいいぜ。なあ皆！」

すると周りから「当たり前だ。」と言つ声が聞こえてくる。

「じゃあ、決まりね。ちゃんと約束守りなさいよ。もし、破つた  
ら退学して魔力の剥奪よ。」

「いいぜ。ここにいる皆が証人だ」

なあ、真、お前はさ、余計なことしか言えないのか？まあいいか、  
これであのイケメソ君が近づかなるなら。にしても、やれやれ、ま  
ためんどうな条件が増えたもんだ。

そして、いよいよ決闘が始まる。審判はUクラスの担任の先生が勤  
める。

「それでは、ルール確認をします。まず、央太君の勝利条件は相  
手が降参するか、戦闘不能になるかのどちらかになれば勝ちです。  
今度は――（イケメソ君）の勝利条件は、相手が降参するか、  
戦闘不能になるか、一回攻撃を当てるか、一分以内に倒されなけれ  
ば勝・・・・ち？つてこれおかしいじゃありませんか！！何で、――  
――（イケメソ君）の方が有利何ですか！？こんなのおかしいで  
すよ。学年次席対Gクラスの生徒ですよ？普通、逆じやないんです  
か？」

「大丈夫ですよ先生。本人が認めていますから。」とイケメソ君  
が言つが、

「しかし、これは・・・・

「大丈夫よ。むしろハンデが少ない位だわ。」

理事長がそこまで言つなら・・・良いでしょ？それでは、始めます。  
位置についてください。武器を予め作るのなら、作つて下さい。」

「はい。水よ敵を貫く刃となれアクラ・ランス。」

「何だ。所詮古代魔法の初級魔法じやないか。俺は武器なんて入

りません。」

「分かりました。それでは始めます。いざ、ファイト！！」

かけ声と同時に身体強化魔法を使用、相手は、いきなり広範囲攻撃である、現代魔法の水属性の弾丸を撃つてきた。ぶつちやけ避ける隙間がないほどだ。普通の身体強化魔法ならだけど。俺は一瞬で電気属性を附加して、上に飛ぶ。それだけで、弾丸の範囲から脱出、そのままブレスレット型のSASに魔力を流し、空中に水で出来た足場を形成し電気属性を附加した身体強化魔法を使つたまま、足場を蹴り敵に向かつて突つ込む。試合開始から、まだ3秒もたつていない。突つ込みながら、敵に水の槍をつきだした。槍は先が丸くなつていて、刺さりはしないが、電気属性が附加されているため当たれば気絶は確実だ。しかし、あつさりと気絶させてやるつもりもないため、治癒魔法を附加し、気絶しないようにする。つまり、相手はずっと電気を浴び続けるわけだ。そんな感じの攻撃を突つ込んだ勢いのまま当てた。

外野 side

外野が見たのは、イケメソ君が水の魔法弾をばらまいて勝利を確信した瞬間、上からいきなり央太が降つて来て、気付いた時には槍がイケメソ君の腹に突き立てられている状況だった。

央太 side

腹に槍が当たつたため、そのまま作つた槍の能力を使用し、ダメージを与え続ける。多分、五秒も浴びていれば、普通の人なら気が狂うほどの電流がながれている。まあ、一応こいつらも魔法使いなので三十秒位は持つだろう。

「おい、降参するか？」

「ぎゃああああああああああ

「うるせえんだよ！」

俺は槍を強く押し付けていると、

「ストップ！試合終了よ」

と我に帰った先生が止めてきた。しかし、

「でも先生こいつまだ、降参してませんし戦闘不能でもないですよ？」

もう、既に槍を押し付けてから十秒以上経っているのにまだ降参しない。こいつ結構、根性あるな。

まあ、痛すぎて喋れないだけだろうけど。とか思いながら見ていると、未だに「ぎやあああああ」としか言わないのどうるさいなーと思い、ちょっと電圧を上げてみようかな?と考えていると、

「央ちゃん、止めてあげなさい。」

と霧さんの言葉が響いたので治癒魔法を解除して、電気を浴びせて、氣絶させた。

「――――（イケメン君）戦闘不能のため、勝者は、見中 央太君です。」

俺は別に嬉しくもないのでも、S A Sを片付けて欠伸をしながら皆の下に帰った。

イケメン君サイドにいた人達は未だに畠然としていた。まあ、しようがないだろう。なんてたつて学年次席がGクラスの相手にあれだけの好条件なのに、二十秒からずにやられたのだから。

俺はめんどくさいことをやつちまつたなー。と思いながら、皆の方に歩いていった。

## クラスの差別として決闘へ（後書き）

感想をお願いします。できれば、バトルについて。

## 決闘後の平和な日常

「お兄ちゃん」「

と第一闘技場を出て、皆の下に向かいつと、真が抱きついてきた。

「まあまあじゃねえの？」

「そうですよ。央太様が本氣を出せば、一秒からずに終わつた  
はぢですのに。」

「本当だな。ちよつと、遊び過ぎじゃないのか？」

「うん。まあ、でも相手を完全にボコボコにしたい、って気持ち  
も分かるよ。イケメン君も心が腐つてゐみたいだしさ。」

と上から、風希、レン、炒子の順で辛口の評価をしてくる。しかし、最後の召慈の言葉が不思議だつたので、聞き返す。

「何でそんなこと分かるんだ？」

「決まつてゐるじゃないか。聖靈を放つてたんだよ。心を読めるやつをや。」

と召慈が答えると、

「あ、やつぱり？いやね、私もやつから聖靈を感じてたのよね。  
だいたい予想はしてたんだけど、やつぱり召慈のだったのね。」  
と神流が会話に混ざつてくる。

「ああ、そうだよ。んで、イケメン君は心の中でお兄ちゃんに、  
して する。さらには してから する。的な感じの妄想をずっとしてたんだよ。」

と召慈がいふと、神流がが顔を真つ赤にしてつむいてしまつた。  
まあ、当然俺に抱きついていた真にも聞こえ、「お兄ちゃんが相手  
なら別に・・・と、とんでもないことを呟きだした。

「まあ、確かにクズ野郎だな。だつたら、もう少し電流浴びせと  
けば良かつたかな？」「だめよ。あれ以上やつたら、あの子壊れ  
てたわよ。」

と霧さんが割り込んでくる。確かに霧さんに言われたから、攻撃を

止めたんだつたな。とか考えていると、

「せなみに私も  
や、も言いたよ。」ハレイに詰密範囲なした  
から、可能よ。」

いや、しねえーよ！？「  
てゆーか、聞こえてたのかよ。」

「もちろん。あなたの心の声までね」

よし、今日から無心になる練習をしよう。と俺は心に固く誓つた。

「まあ、無理だと想ひながら。」

あ————。もう読まないでくれ————。と俺が心中で叫していると、Sクラスの担任の先生（これからこの人のことは、美人で胸もでか・・・・おっほん。スタイルもいいので、サキュバスから取つて、サキュ先生と呼称する）途中で信じられない程の殺氣を感じながらも、ニックネームを付けた。俺の後の方で霧さん、真、エレンが自分の胸に手を当てて、「やっぱり、大きい方が良いのかな？」とかなんとか呟いているが、気にしない。気いたら負けだと思う。ちなみに炒子は自信があるのか、勝ち誇ったような顔をしている。

ところで、サキュ先生がこちらに来て、俺に聞いてきた。

「あなた、水属性のクラスよね？どうして、電気属性を附加した身体強化魔法が使えるの？」

おお！流石学園内において、霧さんに次ぐ実力なだけはあるな。あの一瞬で見分けるとは。

（ちなみに電流を流していた時は、電流が見えないようにしていたので、外からではイケメソ君がいきなり苦しみ始めたようにしか見えない。）

「ええ、そうですよ。でも別に属性魔法が一種類使える人は、少ないだけで居るじゃないですか。」

そう。属性魔法が二種類使える人はいる。といつても、日本には指で数えられる程しかいないが。ちなみに霧さんも二種類使える。霧

さんが入学式の時に使つた氷の魔法は、水属性と風属性を合わせた魔法だ。この事より、霧さんが使える属性魔法は水と風属性になる。

「確かにそうですが……しかし、それなら政府に申請しないとだ

「別に申請なんてしなくても良いんですよ。俺は一種類使えると言つても、しょぼいレベルですから。」

それでも申請しないといけません。なので、登録のために親の名前を教えてください。」

と先生が言つてきたので、

「先生。俺、親いないんですよ。今の親は義理の親なんです。だから、正確な血筋なんて、分からないので登録してもま意味がありません。」と答えた。この、親の名前が必要と言うのは、血筋を調べるために使うので先に釘を指しておいた。政府は、一種類、属性魔法を使える人より、その人の血筋の方を知りたがる。理由は簡単で、その血筋の人と色々な人を結婚させて、新しい属性魔法が二種類使える人を作るためだ。（属性魔法が二種類使える人は何故か、子供が生まれにくい。）

ちなみに、俺が言つていたことは事実だ。つまり、真は義妹で姉貴は義姉にあたるのである。

サキュ先生は、

「そうだったのね。それじゃあ仕方無いわね。嫌なこと聞いてごめんなさい。」

と言つてきた。少し寂しそうに言つた効果はあつたかな？別に俺は何とも思つちゃいないんだが。真達の親だつて本当の親だと思ってるし。はつと、気付くめつちゃ暗い雰囲気になつていた。しかし、召慈だけはニヤニヤしていた。ああ、そつか、あいつ心の読める聖靈を出してたんだつけ。まあ、それにしても、あいつよく持つよな。ああいう、特別な力を持つた聖靈は一分でも続けて出すのは大変だつて聞くぞ？それをもう二分以上だなんて、規格外過ぎるだろう。まあ、ここにいる奴等は皆、規格外なので気にしないことにする。

れて、

「おい、皆さうさう帰らうぜ。」

「いいよ、分かった。」

「うん。お兄ちゃん。」

「そうですね。帰りましょうか。」

「じゃあ、私も帰らうと。」

「そうね。帰らうか。」

「ああ、早く帰らぜ。」

「そうだな。帰るか。」と、畠慈、真、エレン、炒子、神流、風希、圭悟の二にじにいた。幼なじみズの全員が返事をしたので、そのまま庭で雑談しながら帰った。

家について、くつろいでいると、真が寄りかかってきた。若干だが、暗い顔をしている。

俺が「どうした?」と聞くと、

「今日、疲れた?」と聞いてきた。

うーん、なんかおかしいな?他にもひとつ聞きたことがあるような顔をしているのだが。まあ、とりあえず、

「いや、別に。」

と質問に答えた。ちなみに、これは事実。まだ、一昨日真達にお仕置き?といつも尋ねた時の方が、倍ほきつかった。いや、マジで。

にしても、やはり真はまだ何か聞きたそうな顔をしている。しゃーない。少し自分で考えてみ・・・るとあった。あれしかないように。うん。よしよし。なら俺が言つことは一つだな。「俺は親父達を本当に親だと思つていてるぞ?それに、真や姉貴だつて血は繋がつてな

「いけど、家族だと思つてゐるから、別に寂しくないぞ。」

と俺は本心を伝えた。すると、さつきまで暗かつた真の顔は明るくなり、笑いながら、

「うん。そうだよね。私達は家族だよね！」

と嬉しいそうに抱きついてきた。

まったく、手間のかかる妹だな。とか思いながら頭を撫でてやつていると姉貴が帰つて來たので、一人で迎えにいった。

「お帰り、姉貴。」俺が声をかけると、（真は既に離れている。）

「ただいま、央君。」

と言つて抱きついてきた。いや、抱きつかれていた、と言つた方が正しいかな。あまりにも速すぎて、身体強化魔法を使つたんじゃないか？と思わせる程の速度だった。

「うん。今日は央君エネルギーが不足しちやつて危なかつたよ。

」  
と俺の胸板に頬を擦り付けながら言つてきた。不足だけでこうなるのだからもし、そのエネルギーが切れた時には想像も出来ないようなことになるのは間違いないだろう。

「あつ、そうだ！ねえねえ、央君。明日からも、一緒にお昼ご飯食べようよ。」

と姉貴から、提案がきたので、

「まあ、いいよ。」俺はあまり考へることなく、了承した。

「つてな訳で今日は皆で飯食おうぜ。」

と俺は風希と召慈に提案した。一人とも、

「別にいいよ。」

「俺も構わねえよ。」

と心良く受け入れてくれた。

そんなこんなで、昼休み。（ヨキ先生は未だに学校には、来てない。）俺達は集合場所である、屋上に向かつた。屋上では既に皆集まつていて、俺達は最後だった。ちなみにメンバーは、姉貴、真、エレン、炒子、神流、圭悟、風希、召慈、俺そして、霧さん…ん？つて、

「何で霧さんがいるんですか！？」

「そんなに驚かなくても良いじゃない！ああ、私スッゴい傷付いたわ。これはお仕置きしかないわね。」

という言葉と同時に、周りの気温が下がり始めた。これは、霧さんが氷属性の魔法を使う合図だ。

「ちよつと、霧さん。落ち着いてくださいー俺が悪かつたですからー」俺が必死でなだめていると、

「本当に反省してる？」

と聞いて来たのでしめたー！と思いつつ、

「はい。海よりも深く。」

と答えた。すると、

「しゃあここに座りなさい。」

と自分の隣を呼び指していった。俺が胡座をかいて座ると、霧さんが膝の上に乗つてきた。俺は、呆れながら「あんた何歳だよ」「と思つていてる」と、

「うるさいわね。折角の外見なんだから上手に使わない意味ないじゃない。」

と言つてきた。おお、すつげ。口リ体型をこんな形で乗りきつてる人がいるとは、流石霧さん。やっぱり、他の人とは発想から違うな。おっと、これは別に悪口じゃないですヨ。ホントデスヨ。つてな具合で、楽しい昼飯の時間は、過ぎていった。

そして、午後の授業中、

「1年Gクラス、見中 央太君。至急、会議室まで、きてください。

」

と放送がかかった。

「なんだ、央太。なんかやらかしたのか？」

「いや、俺は別に何かやらかした記憶はないんだけど・・・」

「まあ、取り敢えず行って・・・いや、僕らも暇だしついでい

くよ。」

「分かった。それじゃあ、いくか。」

そうして、俺達は教室を後にした。

## 決闘後の平和な日常（後書き）

次は、またもや決闘の予定です。でも、戦うのは・・・

俺、風希、召慈の三人は、会議室に向かつっていた。

「なあ、央太。本当に何もしてないのか？」

「当たり前だろ？ てゆーか、何かやらかしたんなら、会議室じやなくて職員室だろ？」

「まあそうだけど、でももしかしたら、ゴキ先生のことかもよ？」  
「んつ。確かにあり得るかも知れないが、何か違うような気がするんだよなー。まあ、あくまでも勘なんだけどな。」

「えつ、ああ。分かつた。もう帰つていいよ。そうだね。あながち間違いでもないかも。さつき飛ばした聖靈が今帰つてきて、会議室の様子を聞いたたら、中に真ちゃんが居るつてさ。」

「真が？ あいつは何かやらかすような奴じゃないんだけどな。」  
「どうしたんだろ？」と考えていると会議室に着いたのでドアを開けて入つた。

「失礼します。」と声をかけながら、入つた。風希達も同じように声をかけながら入つてきた。中には、サキュ先生と真、あと見知らぬ男子生徒がいた。彼の胸元を見るとSとかいてある。成る程。Sクラスの生徒か。サキュ先生の方に視線を向けると、サキュ先生はこちらを見て、何故、風希達が居るのか分からぬ。というような顔をしていたので、

「心配だったから、付いてきたんです。授業は自習ですし、友情の方が大事ですから。」  
と召慈が説明していた。

嘘つけ、面白がって付いてきただけの癖に。まあ、でも俺の問題じやなかつたから、ちょっとは心配しているのだらう。（ちなみに、俺の心配はするだけ無駄だと言つていた。）

サキュ先生は召慈の言葉を聞いて納得したように頷き、（納得すんのかよ！）俺達に座るように促した。俺達が座ると、サキュ先生は話始めた。

「実はですね、ここにいる風属性のSクラス生徒の彼と真さんが喧嘩をしたんです。先に仕掛けたのは、彼らしいのですが、理由を話してくれないんです。真さんは「何も言いたくない。」の一点張りで、そこにいる彼は、央太君を連れてきたら、話すと言つたので呼んだんですが・・・あの話して貰えませんか？」

とサキュ先生が、風属性のSクラス生徒（これからは、彼の偉そうな顔が腹立つので、天狗君と呼称する）に話すことを促した。（ちなみに、真はいつの間にか、俺の腕に抱きついていた。）俺は真の頭をゆっくり撫でながら、天狗君の話を聞いた。

「まず、友達がそこにいる男の話を聞いて、そういうえばSクラスに同じ名字の人がいたなと思い、授業中（Sクラスの生徒は授業中だけ同じ教室に集まり、授業を受ける。それ以外は、基本的に各属性のAクラスの教室にいるように言われている。）に聞いてみようと思い聞いていたら、いきなり彼女が喧嘩を売つてきただんです。」

と天狗君が答えると、

「違います。嘘ばっかり言わないでください！。本当は、私がお兄ちゃんの話をしていたら、「Gクラスの『ヨミ共と家族だなんて残念ですね。』って言つてきたんです。だから私が「でも、あなたなんてGクラスにいる、お兄ちゃんとその友達である風属性のGクラス生徒、召喚術のGクラス生徒にも勝てないわよ。」と言つたら、いきなり殴ってきたんです！」

成る程な。まあ確かに天狗君は自尊心が高そうだもんな。しかし、人の妹をいきなり殴るのは賛成できないな。とか考えていると、

「だつて、しょうがないじゃないか！こんな『ミ共に負けてる何て言われたら！だから、俺はお前らに決闘を申し込む。この女は、Gクラスのクズ三人に勝てないといった。だから三人まとめて相手してやる！』

と天狗君が喧嘩を売つて來たので、妹を殴つてくれた、お礼をしよ  
うかなー。などと思つていると、風希が、

「いいぜ。俺が相手してやるよ。もし俺に勝てたら、他の二人と  
戦えばいい。」

と言つと、天狗君が、

「はあ、何言つてんだお前？お前一人なんか、秒殺してやるよ。」  
と言い返してきた。

まあ、それじゃあ今日は風希に譲かと思い、召慈の方をみると、召  
慈も頷いてきた。だから、

「サキュ先生。ということなので、明日闘技場の予約をお願いし  
ます。」

と俺が言つと、サキュ先生はやれやれと頭を振りながらため息をつ  
いていた。

そして、会議室を出ると、

「おい、風希。絶対に勝てよ。意味もなく真を殴つた罪は重いか  
らな。」

「わかつてゐるよ。おもいつきり屈辱を味あわせてやるよ。」

まあ、風希なら本当にやつてくれるだろう。さて、

「真、お前意地がわるいな。俺達三人の名前を的確にあげるなん  
てさ。」

「本当だよ。しかも僕ら三人まとめて相手するなんて自殺行為で  
しかないし。」

と召慈も賛成する。

「だつて、ねえ？」と真が少しバツが悪そつにモジモジする。

「あつ、そうだ。風希さ、あの戦法を使うの？」

と召慈が思い出したように聞くと、

「ああ、もちろんだ。あれ以上に侮辱的なことは無いだろうからな。」

と風希がにやけながら答える。

あの戦法って何だっけ？・・・・・あつ、

「対風属性魔法使いよつのがれか！」

「ん～まあ、今は対風属性魔法使い用じじゃねえけどな。」  
と風希が答える。よつしゃ、ビンゴだぜ。そうか、あれ使うのか～。  
うん。これは面白くなじそうだ。さて、真に頼みたいことが出来た  
ので、真の方を見ると、真はまだ、あれが何なのか、考えているみ  
たいだった。なので、昼休みにでも話そうと思つて、一旦別れた。

そして、昼休みがきた。屋上に集まつたみんなに、俺は今回のこと  
を話、みんなにお願いを一つした。

「明日の放課後、闘技場に人を沢山連れてきてくれ。」

皆、不思議そうな顔をしていたが、了承してくれた。そして、この  
場は解散し、教室に戻る途中で、召慈が、

「あんな頼み事をするなんて、真ちゃんよりも、意地が悪いじゃ  
ないの？」

と召慈が笑いながら言つてきただので、

「そうか？」

と俺も笑いながら返した。

そして、翌日の放課後。

闘技場には、風希と天狗君が向かい合つてたつていた。今はサキュ先生がお互いの勝利条件を確認している。闘技場のスタンドは人で埋まっている。（俺達はスタンドの下にある特別席から見ている。）今から起こるであろう出来事を思つて、思わずニヤケてしまう。召慈も同じらしく、さつきからニヤニヤしている。そんな俺達一人を、幼なじみズは冷たい目で見てきた。

おつと、決闘が始まるみたいだ。

「それではいきます。レディ、ファイト。」

とサキュ先生の慷とした声が響くと同時に相手は『風よ我が身を運ぶ羽となれ、ウヰンド・フライ』としつかり、詠唱をして空に飛び。（ちなみに、空を飛ぶことは、風属性の魔法使いでもなかなか難しく、古代魔法の上級魔法にあたる。）

でも、これで風希の勝ちは決まった。相手はそんなことに気付かず、「お前は空も飛べない癖に決闘をしようと言つのか？流石Gクラスのクズだな。いや、飛べないのか。悪いな、Gクラスには無理な話か。」

などと、空を飛ばない風希を見て、バカにしている。幼なじみズも、「どうして空を飛ばないのか？」

と不思議に思つていたので、俺と召慈が笑いを堪えながら、

「まあ、見とけって。」

と言つて、皆をなだめた。そしたら、天狗君が、

「つまんねえな。飽きたから終わらしてやるよ！」

と息巻いたが、進まない。天狗君は何度も進もうとするが、進まない。そして次の瞬間、逆さづりになつていた。（幼なじみズはそれをみた瞬間、風希が何をしているのか理解して、俺達と一緒に笑いを堪えるのに必死になつた。）そして今度は、流れるように踊り始めた。天狗君は必死になつて、止めようとすると、止まらず、そのダンスと表情のアンバランス差が面白く、俺と召慈はもちろん会場

のいたるところで、笑いが起きている。天狗君は顔を怒りと羞恥に歪ませながらも今度は壁にぶつかり始めた。だんだんと顔が恐怖に強張つていった。そして最後に床に向かつて頭からまつすぐ可愛いらぐ「きやああああああ」と悲鳴をあげながら進んでいった。（これにより、天狗君オカマ説が浮上した。）そのまま床に直撃して頭を埋めて、体をピクピクさせながら気絶した。もう、観客と俺達の笑いは止まることはなかつた。

### 風希 side

天狗君はいきなり空へ飛んでいった。俺はここまで、すんなりと作戦通りに行き過ぎて拍子抜けしてしまつた。その間に天狗君は何か言つてきたが、聞こえなかつた。そもそも始めるか。と思い、周りの空氣に魔力を流し始めた。それにより、闘技場全体の空氣を掌握に成功。俺はニヤケるのを我慢しながら、風が俺の意思でしか起らぬように設定する。これでの天狗君は動けなくなつた。それじゃあ、まずは踊つて貰おうかな？

俺は上手に踊れる用に、周りの空氣から風を生み出す。うーん、思つたより、難しい。まあでも、もう三分くらい踊らして飽きてきたので、今度は物理的ダメージを壁にぶつける事によつて与える。天狗君の顔が恐怖で強張りだしたので、その顔をみんなに見せた後、床に向かつて頭から落としてやる。途中で可愛いらしい悲鳴をあげていたので、ついつい笑つてしまつた。

「勝者は、神谷 風希君。」

とサキユ先生が、信じられない物をみた、という顔で告げる。俺達は走つて風希のもとに向かつていつて、本日面白い物を見させてくれた幼なじみに、祝福の言葉を捧げた。

しばらくすると、霧さんがきて、笑いながらやり過ぎだ。と言つて  
きた。そして、後の処理を霧さんに任せて帰ろうとしたらい、サキュ  
先生が走ってきた。一体どうしたんだろう?と思つてみると、

「風希君、あなた一体今のどうやってやったの!?」

つと、そういうえ、サキュ先生は風属性の魔法使いだつたけ?そし  
て、質問された風希は、

「やだなー、先生。俺は何もしてないじゃないですか。」

と笑つて答えただけだつた。

## 再び決闘（後書き）

今回は、日頃残念な風希が活躍しました。そのつま、召慈も活躍させようと思っています。是非、感想をお願いします。

## 休日？

今日は、休日だ。

俺達の通っている学園は、週休2日制なので土日は休みなのである。思い返せば、入学してからの五日間はいろいろあった。

まずは、入学式。脱走に失敗して、霧さんに捕まる。その後、身体強化魔法を使い学園内を走り回り帰宅。帰宅すると、今度は浮気の疑いをかけられ、（別に誰かと付き合っている訳ではないのだが）ボコボコにされ気絶しながら、就寝。

2日目はクラスの発表を見て驚き、先生のクズ加減を見て驚き、イケメン君に決闘申し込まれたことに驚きと驚いてばかりの1日だった。

3日目は決闘があった。あの程度で学園次席とは、今思い出しても笑える。

一昨日は姉貴達と一緒に昼ご飯を食べ始め、授業中に呼び出しをくらいい、天狗君に決闘を申し込まれた。まあ、俺が受けた訳じゃないけど。

昨日は、風希対天狗君の勝負があり、風希の圧勝。最後に格好良く決めたあと、サキュ先生の前から立ち去る時に転んでしまって台無しになつた。まったくどこまでも、残念なイケメンである。

いやー、思い返せば本当に濃い五日間だった。普段の俺じゃあり得ないぐらいの忙しさだった。学園に入る前は、もう凄いものだった。学校すら、サボったことが合計で3ヶ月分ぐらいにはなるだろう。

あ～あ、なつかしな～。せめて、休日ぐらいゆつくりしたかっただぜ。  
ということで、俺は今日も予定が入っている。それは・・・勉強会だ。

てな訳で、俺は今、家を掃除している。何で掃除をしているのか？  
そんなの簡単だ。会場が俺の家だからだ。何故、勉強会をするのか？  
それは、昨日にさかのばらなければならないだろう・・・・。

昨日、風希が転けた後、霧さんが言つてきた。

「あつ、月曜日に筆記と、実技の試験するから。」

「「「えつ、「驚いたのは、俺と召慈、そしてまだ起き上がつてこない風希だけだった。」

「えつ、お兄ちゃん知らなかつたの？私達は最初の授業の時、言われたよ。」

と真が言つてきたので、

「「「最初の授業の時・・・・」」俺達三人は、思い出す。「キ

先生が初めて来たときの事を・・・・、

「あつ、俺達聞いて無いわ。」

「うん、そうだね。僕らは何も聞いてない。」

「先生なんか俺達を罵倒した後、黒板に自習つて書いてどつかいたんだつたもんな。」

俺、召慈、風希の順で答える。そして、

「「「てことは、俺達受けなくていいですよね。霧さん。」」

と三人で声を合わせて聞くと、

「まあ、それじゃあしようがないわね。・・・・とでも言つとつてるの！？」

と霧さんが乗りつつこみを入れてきた。しかし、

「あつ、でも央ちゃんが私と愛し合つてくれるな

「喜んで試験を受けさせてもらいます。」

・・・・ちつ！」

俺が試験を受けるむねを伝えると、盛大に舌打ちをしてきたのだった。

と言つわけで試験を受けることになつたのだが、いかんせん時間が無いため、みんなに教えて貰おうと思い、勉強会を開くことにした。みんなにどこでやりたいかを聞くと、エレンと炒子が俺の家じゃないらしい。と言い始めたので俺の家であることになつた。姉貴に相談したところ、リビングでするようになつた。

しかし、俺は今、自分の部屋の掃除をしている。リビングは一階で俺の部屋は一階。（ちなみに、姉貴達の部屋も一階にあり、一階はリビングやキッチン、洗面所などがある。）

一見、関係無さそうに見えるが、多いに関係ある。何故なら、確實にエレンや炒子が見に来るからだ。この前、この一人が来たときは、「部屋を掃除してあげます。（る）」と一人に強制的に入られ、俺のコレクションがいくつか見付かってしまった。

あの時は本当にヤバかった。もちろん怒られたが、方向が違つたらやばかった。一人とも、

「もう、言つてくれればいつでも良かつたのに……」

と言いながら、服を脱ぎ始めた。

いや～、あの時は焦つたね。いやガチで。もし、あの時真が来なければ、俺の将来は決まってたね。うん。

と言つわけで俺は今、せつせと掃除をしている訳だ。

勉強会は午後からなので、まだ一時間ぐらい余裕がある。俺は自分の部屋の掃除を終わらして、姉貴たちを手伝つために下に降りていつた。

掃除が終わつたが、まだ約束の時間まで一時間近くあるので、姉貴達とゆつたりしようと思い、姉貴がお茶を入れていると、

「ピンポン！」とインターホンがなつた。

「央～君、今ちょっと手がはなせないから、変わりに出てくれな

い?」

と言われたので、めんどくさいなーと思いながらも、玄関までいき、ドアを開けると、小学校低学年くらいで、銀色の髪を肩まで伸ばして、先が軽く丸まっている小さな女の子が大きいバックを持って立っていた。家を間違えたのだらつか?と/orあえず、

「どうしたの?」

と聞いてみた。すると、封筒を差し出してきた。

受け取つて見ると、手紙にしか見えなかつた。うわっ、やつべ。嫌な予感しかしねえ。

俺の第六感が警報を鳴らしているが、とりあえず裏を見てみた。すると親父達の名前があつた。

ちなみに、名前をみた瞬間俺の第六感は「諦めろ」と告げていた。恐る恐る封筒を開けると、やはり手紙が入つていた。手紙を読んでみると、

「この子のこと、よろしくなー」と書いてあつた。やつぱり?

「へ、訳なんだけど、する?」

俺は姉貴達に聞いた。

「どうするつて聞かれてねえ?」

「やうだよ。どうしようつもないよ。」

と言つてくる。

「だよな。やっぱり、この子に聞いた方が早いんだけど・・・」

さつき、玄関にいた女の子は俺達の向かい側に座つて居るのだが、警戒心剥き出しで睨んでくる。

しうがないので俺は水の魔力を体から少しづつ、放出させる。

ちなみに、これにはちゃんと意味がある。人とは、自分が知らない人しかいない空間で、同じ属性の魔力を流されると、ついついその人のもとへ行ってしまうものだ。だから、俺は、全ての属性の魔力を流していく。しかし、反応しない。俺はもしゃと思い、もう一つ流してみるが、これも無反応。じゃあこれは？と思い魔力を流した瞬間、その子が抱きついてきた。

俺は驚いていた。抱きつかれたことではなく、この子が反応を示した属性について。そんな、バカな！何で世界でも十人といない属性の持ち主がここにいるんだ？

しかし、ここに来たということは・・・確かにここにいた方が安全だな。親父達の判断は正しいと思う。よし、それならやることは一つだ。俺は、女の子を膝の上にのせて、未だに女の子が俺に急に抱きついたことに衝撃を受けている姉貴達にいった。

「この子は、家で預かろう。」と。

休日？（後書き）

新キャラ登場です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8017x/>

---

ええ～めんどくさい

2011年10月26日14時07分発行